

《第10回国際日本学シンポジウム報告7》

源氏物語の千年 —日本と欧米における源氏絵の旅— 趣旨

ロール・シュワルツ＝アレナレス*

源氏物語千年紀にあたる今年、展覧会、シンポジウム、出版物、映画など、これを記念する芸術的、学術的な催し物が国内外で数多く企画されており、今日なお我々現代人に問いかけ広く海外にも波及するこの世界文学の金子塔の驚くべき生命力、普遍性を物語っている。

こうした多様で内容の濃い源氏物語千年紀プログラムの中で、「源氏物語の千年～日本と欧米における源氏絵の旅～」と題した国際日本学シンポジウム第2セッションの意義と特色とは何だったのか。文学、美術史から『源氏物語』を研究する4名の専門家が多くの聴衆の前でそれぞれの研究の現状、考察を発表した本セッションの開催に至るまでを、企画者として振り返ってみたい。

グローバルで比較文化的なアプローチ

本セッションの主な考えと方向性は、毎年国際日本学シンポジウムを開催している比較日本学教育研究センターの特色と目的に密接に関わるものである。そもそも4年前に設立されたこの研究センターは、世界中の様々な国の日本学研究拠点と交流を結ぶことを使命としていることを想起したい。毎年恒例のこの国際日本学シンポジウムや、講演会、共同ゼミ、メンバーらによる共同研究では、歴史、文学、美術、社会学、思想、言語といった複数分野にまたがるテーマを通して、そして海外の拠点との交流の中で、国外における日本学の受

容と普及の問題と比較文化的方法論を追究している。

こうした目的に照らし合わせると、『源氏物語』は19世紀末に外国で日本学が最初の進展を見せ始めた頃から重要な位置をしめており、また日本や欧米で現在進行中の研究、展覧会、翻訳も多く、考察のテーマとして極めて重要で刺激に満ちたものである。『源氏物語』に関わった著名な日本学者の一人、ルネ・シフェールは、今からちょうど20年前にフランス語の全訳を出版したが、その序章の中で読者に向け、『源氏物語』を日本というコンテキストの中に据え直すことの重要性と同時に、この小説の時空を越えた普遍性を強調している。

読者の方々にはこのことに関してもすぐにご理解いただけたらと思うが、時代や国の違いからくる違和感を感じたことは、一瞬たりともなく、逆に極めて現代的な知的冒険、いやむしろ精神的冒険の中に身を投じているという印象が常に付きまとっていた。筆者も最初は日本や西洋の批評家に続いてフロイトやとりわけブルーストの名前を引き合いに出していたが、20年近くに渡る苦勞と考察を終えた今、このような比較は全く不自然なものであり、単なる言葉の“あや”であることが分かった。真実はここにはなく、ヨーロッパ中心主義を映し出すだけのこうした上辺の理解の向こうにあるのだ。多くの日本人はこうした考えに追随し、あるいは追随するふりをし

*お茶の水女子大学 准教授

ているが、長い習慣で固まり、曲りなりに定着した常套句（訳者注：「紫式部＝日本のブルースト」などといった常套句）によって表向きには確立されてしまっている固定観念を再び問題視するよりも、確かに簡単なことである。

いずれにせよ、山のように積み重ねられた解釈の下に、そして当然のことながら古風とみなされる言語—しかし現代口語というフィルターを通さない外国人は抵抗なく近づけるという特権を持つその言語—の下に、表現を除けば今も昔も変わらない分析、対話を見出したような気がしたのである。

分野や国を超えた比較文化的なアプローチのもと、日本学にとって中心的なこの作品をめぐる生まれた方法論や課題を検討するために、日本、フランス、アメリカそれぞれの研究施設で『源氏物語』を研究している、文学と美術史という異なる学門領域と、異なる世代に属する4人の研究者を本セッションにお招きした。大学から美術館、テキストの分析から視覚的な解釈、平安時代の絵巻から現代の漫画まで、発表を通して、日本や海外でこれまで『源氏物語』研究を培ってきた視点の多様性を打ち出したいと考えた。

しかしながら日本そして海外でも早くから発展してきた膨大な研究の歴史を要約するという無謀な試みを行うのではなく、日本、フランス、アメリカが『源氏物語』研究、あるいは広く日本学研究の歴史と発展の中で果たしてきた重要な役割に焦点を当てることで、グローバルな視点から考察することにした。この三国は、その文化的、言語学的特徴から、それぞれ特色ある、そして時に対立しながらも相互補完的な分析を生み出してきた。

『源氏物語』研究の場合特に言えることであるが、こうしたグローバルな、あるいは比較文化的なアプローチが有効であるためには、平安時代の文化について、文学、芸術、社会、歴史といった

あらゆる面での確かな理解の上に立脚したものでなくてはならない。1921年から1933年の間に出版されたアーサー・ウェイリーの最初の英語訳の後、フランスやアメリカで、1976年にエドワード・サイデンステッカー、ルネ・シフェール、最近では2001年にロイヤルタイラーといった日本学者らの、厳密で博識に裏付けられた新しい翻訳が出版されたことで、作品の歴史的背景へのより正確な理解が可能となり、『源氏物語』への関心と研究を大いに刺激し、日本の専門家との協力で、学際的な共同研究が発展してきた。

また、今日世界中であらゆる知の領域が専門性を高めていることと、源氏物語が今日、より細かな、そしてより多くのフィルターを通して研究される傾向があるということは、おそらく無関係ではない。多様な知識とアプローチに意味と一貫性を与えるために、日本やフランス、アメリカで研究内容や方法論を定期的に突き合わせる、より共同的研究が今日不可欠となってきている。

例えばフランスでは、『源氏物語』研究において10数年ほど前から大きな変革が見られるが、これはこの数十年の間、平安時代について研究をしてきた優れた日本学者らの功績によるところが大きい。例えばイコノグラフィーと思想の分野におけるベルナール・フランク、文学におけるジャックリーヌ・ピジョー、歴史におけるフランシーヌ・エライユ、あるいは仏教におけるジャン＝ノエル・ロベールといった学者らである。5年前よりINALCO、パリ第7大学の研究者ら10数名が集まってできた『源氏物語』研究グループは、この小説の新しい翻訳に取り掛かり、最初の成果である注釈・解説付きの「桐壺」が、シフェール訳からちょうど20年たった昨春、INALCO発行の雑誌『Cipango』に発表された。学際的な共同作業を大きな特徴とするこの意欲的な翻訳プロジェクトの一環として、『源氏物語』に関する日仏研究学会が数日間パリで行われた（その議事録は『Cipango』に一部記載）。このグループに密接に

関わるエステル・ポエール氏は、今回の発表で日本ではあまり知られていないその活動の目的と内容について触れられた。ここではその『Cipango』特別号の編集長であるINALCO教授、平安文学の専門家である寺田澄江氏の言葉を以下に引用させていただきます。

2004年より、この小説に関する4日間の研究会が開かれ、1日目は文学の問題について、2日目は『源氏物語』の生まれた時代について、3日目は絵画、書、音楽について、4日目は立教大学と共催でこの作品の受容について議論されてきました。それぞれの学会で、『源氏物語』を正面から捉えようとするのではなく、この作品が互いの研究分野の触発剤となるよう試みてきました。（『Cipango Hors-série』: *Autour du Genji monogatari*, 序文より）

フランスで行われている研究のほとんどが、フランス語を解す数少ない日本人研究者にしか知られていないのに対し、アメリカでは、コロンビア大学ドナルド・キーン・センターやハーヴァード大学ライシャワー日本研究所といった日本学の権威ある拠点と、在米の研究所で活躍する優れた日本人研究者のおかげで、『源氏物語』のみならず広く日本古典文学の問題に関する日米の学術交流が、出版やシンポジウム、教育・研究活動といったかたちで、すでに数十年前から急速に発展している。日本とアメリカの研究者は、こうした密なネットワークの中で研究を続けているのだが、フランスの場合と同様に（とは言ってもフランスとは別の理由から）状況全体を把握することは容易ではない。英語圏における『源氏物語』研究は、歴史も長く内容も濃いものであり、先駆者らの残した功績だけでなく新しい傾向を踏まえて、複雑な現状を捉えなおしていく必要がある。渡辺雅子氏も発表の中で触れられた『源氏物語』について現在行われている研究の複雑さと多様性は、例

えば3年前にコロンビア大学のハルオ・シラネ氏とメリッサ・マコーニック氏が主催した国際シンポジウム、“The Tale of Genji in Japan and the World International symposium on The Tale of Genji”の中にも見られた。日米の多くの研究者が集ったこのシンポジウムは、中世から現代に至るまでの、源氏物語の受容とその様々な影響の歴史を分析することを目的とし、ここでもまたグローバルで学際的な視野の下でこの小説を紹介する機会となった。

日本と欧米における源氏絵の研究： 研究の課題と展望

以上のような状況を踏まえ本セッションでは、1000年という長い旅の間に、『源氏物語』の内容そのものと、この作品への関心や研究方法に見出されてきた不変の要素、そして文化的影響、図像やテキストの変動について、グローバルな視点から問うことが目的となった。絵巻物、扇子絵、掛物、屏風、浮世絵、漫画など、様々な形で表わされてきた源氏絵は、日本や欧米で生まれた研究やコレクション、そこにこめられた情報、使用されている素材、技術、表現、それぞれに付与された価値体系、そしてテキストとの絶え間ない会話から、我々の問いに対する貴重な答えを与えてくれるものである。

まず、源氏絵は日本と欧米の研究者の間の唯一の接点を成している点である。日本、アメリカ、フランスで、1960年代の終わりに源氏絵の歴史を初めて紹介した研究者の一人が、著名な美術史家、秋山光和氏であった。海外の権威ある研究所に招かれ、多くの研究者、学芸員を育て上げた秋山氏の功績を我々は今日なお享受し、特別に敬意を払うべき研究者である。最も古い絵巻と源氏絵の多くは日本に保存されているが、後の時代に作られた数多くの作品（その中には非常に質の高いものや、図像学的に極めて興味深いものがある）は今日、欧米の研究施設に保管されている。

例えば、最近ハーバード大学美術館で発見された1510年制作の源氏絵は、現存するものの中で最も絵の揃ったものであった。現在ハーバード大学で日本美術史を教えるメリッサ・マコーニック氏は、渡辺雅子氏と同様にアメリカにおける源氏絵研究の第1人者の一人であり、2003年に雑誌*The Art Bulletin*に、“Genji Goes West: The 1510 “Genji Album” and the Visualization of Court and Capital”と題した論文を発表している。

源氏絵研究は必然的に、主に美術史と文学史という二つの分野にまたがるものであり、時に絡み合うことはあっても別の分野であるそれぞれの知識と方法論をうまく組み合わせることが必要となってくる。この二つの領域の間を行き来できる数少ない研究者の一人が、清水婦久子氏である。清水氏を今回ご招待することは、数ヶ月前にこのシンポジウムの計画が始まってすぐに、本シンポジウムの共催者でもある平野由紀子氏が提案してくださったことである。平安時代の文学の著名な専門家である清水氏は、かなり以前から源氏絵にも関心を寄せ、非常に興味深い著書も手がけている。清水氏の研究は、今回の発表テーマと同様に『源氏物語』における絵画性と文学性、描かれた主題と詩的源泉の緊密でダイナミックな競合について分析するものである。

そして、今日『源氏物語』の普及に大きな役割を果たしている漫画のケースについて、文学的な視点から原山絵美子氏が発表された。現在平野由紀子教授の下で『源氏物語』に関する博士論文を執筆中の原山氏には、「竹河巻」の細かい分析を通して、源氏物語の絵画性についてお話いただいた。

2001年よりルネ・シフェール氏とエステル・レジェリー＝ボエール氏が企画し、おとし、ディアンヌ・ド・セリエ社より出版された、12世紀から17世紀までの源氏絵付きフランス語版『源氏物語』は、あまり研究されてこなかった、あるいはほとんど知られていないものを含む520点の源

氏絵を伴うもので、このコーパスの多様性と重要性を示す大著であり、とくに江戸時代の源氏絵を明るみに出した。著名な美術史家である佐野みどり氏が序章を執筆した、フランスにおける源氏絵研究の大きな穴を埋めるこの本は、日仏、あるいは日米という相互研究の枠を超え、時代や国、制作年代や素材などによって異なる価値体系を与えられてきた源氏絵の、世界規模の俯瞰図になっている。小嶋菜温子氏、小峯和明氏、渡辺憲司氏の編集で、ボエール氏もまた執筆を担当されている、昨春出版された『「源氏物語」と江戸文化』（森話社）の中の作品分析は、この源氏絵付きフランス語版『源氏物語』に提示された問題提起を受け継ぐものである。ボエール氏は今回の発表で、ヨーロッパに保存されている多くの源氏絵を使いながら、この共著についてだけでなく、フランスにおける『源氏物語』への関心の変遷や研究史についてお話された。

源氏絵に対する研究あるいは展覧会、保存や修復活動の多くは、学術顧問との国際的な協力やしばしば日本の経済的支援のもとに行われる。ニューヨーク、メトロポリタン美術館で長年日本美術部門の発展に尽くしてきた研究員、渡辺雅子氏には今回の講演で、アメリカの美術館のバイタリティーと、村瀬実恵子、イヴァン・モリスといった著名な研究者らの研究と結びついた、こうした活動の歴史と現状についてお話いただいた。渡辺氏自身、平安時代の源氏物語絵巻を博士論文のテーマとした専門家であり、現在はメトロポリタン美術館に所蔵してある膨大な浮世絵コレクション研究から、特に「見立て」の問題を通して、江戸時代における源氏物語の表現について研究なさっている。

以上4名の源氏物語専門家の研究、方法論的アプローチは、一般的なテキストとイメージの関係について取り組む、日本学研究の最近の傾向に沿うものである。英語圏、またフランスでも、特に美術史家で日本の書物のスペシャリストであるク

リストフ・マルケ氏の先駆的研究によって、文字とイメージというテーマに関する革新的な共同研究が発展してきた。こうした研究から、INALCOと日仏会館が共同で2006年にフランス語で出版した『筆から活版印刷術へ 文字と本に注がれる日本の眼差し *Du pinceau à la typographie Regards japonais sur l'écriture et le livre*』、そして昨年勉強出版より刊行された『絵を読む文学を見る 日本文学とその媒体』という二つの本の中で、媒体としての本の歴史と、文字のイメージ化が問われている。

最後に、源氏絵の分析から美術史の分野に期待できる新しい展望にも着目したい。美術作品の調査に応用される科学技術の目覚ましい発展により、美術史家たちは技法だけでなく古い時代の絵画の図像や装飾モチーフについて、より正確に分析できるようになった。ちなみに日本で美術調査に科学技術を導入しようとした最初の研究者の一人が秋山光和氏である。こうした科学技術の貢献はまた、文学、歴史、宗教史、社会学の専門家らが、『源氏物語』そのものや平安時代の歴史、文化全体についての知識を深め、研究の新しい道筋を見つける手助けとなるはずである。この事に関し、2007年春にそごう美術館で行われた展覧会、「よみがえる源氏物語絵巻 ～平成復元絵巻のすべて～」の挨拶文を引用させていただきたい。

源氏物語の華やかな舞台が描かれていた絵巻は、色が褪せ、剥落が進み、当時の面影はありません。この絵巻が描かれた当時の姿はどのようなものであったのか、人々はその姿を想像してきました。

そして近年の科学の進歩により、平成10年には、X線撮影や顔料分析といった現代の高度な技術による科学分析が行われ、失われたはずの図柄や模様が判明し、施されていた色彩が明らかになりました。さらに平成11年よりはじまった「源氏物語絵巻」復元模写プロ

ジェクトでは、その研究成果をふまえ、現代の日本画家の洞察と経験によって絵19面が復元され、約900年前に描かれた当時の色鮮やかな絵巻が見事によみがえったのです。

こうして源氏物語は1000年の時を経て我々を驚かせ、魅了し続けているのである。平安時代から21世紀の今日に至るまで、文学、美術研究、科学調査や出版物、展覧会などを通して、源氏絵は世界を旅し、『源氏物語』は常に新しい関心を呼び起こしながら、まさに再び現代によみがえってくるかのようなのである。そしてこの新しい視点は、今後新たな成果をもたらすことになる。こうした傾向と期待に応えるように、2008年7月6日お茶の水女子大学で開かれたシンポジウムは、新しい実り多い今後の研究の展望を開くことに貢献したはずである。